政治のダイナミズムを探る面白さ

吉田　徹
Yoshida Tohru
法学研究科准教授

二〇〇九年秋、自由民主党から民主党に政権交代した日本は、政治上の大きな分岐点を迎えている。『二大政党制批判論―もうひとつのデモクラシーへ―』という近著を出された吉田徹さんに、二大政党制の意味、日本とヨーロッパの政治制度を比較することの意義などについてお話を伺った。

二大政党制とは？

「二大政党制を計る上で重要なのは、政党の数ではなく、政治がどう動いているかというダイナミズム」という吉田さん。では、どういう場合に二大政党制が機能していると言えるのか。「理念を異にする二つの政党が交互に政権交代を繰り返すというダイナミズムがあれば、二大政党制が機能していると言えます。次の総選挙でもし自民党が政権を取れば、日本でも二大政党制が根づいたと考えられるでしょう」。

また、二大政党制は小選挙区制とセットになっているという。「小選挙区制ではその選挙区で一位になった人が票を総取りします。そのため、政党はできるだけ幅広い民意を集約し、多くの選挙区で代表を勝ち取り、多数派を目指します。もちろん、選挙によって、昨日敗者だった政党が今日は勝者になり、政権交代が起きることがある。それが繰り返されることによって、二大政党制ははじめて機能するのです」。

完璧な政治制度はない

そもそも政党とはどういうものなのか。「政党はもともと、国家と社会を架橋するという公的な性格をもち、社会が創りあげるもので、いわば国家と社会の『パイプ役』。社会の側が団結して、ブルジョアや労働者層など、各層の代表を議会に送り込んで、国家の政策や意思決定に関与しようとするところから始まりました。政党は互いに主権の奪い合いを繰り広げていたのです。

一方、民主政治の根底には個人による意思決定があります。政党が弱いと、個人の意思決定を可能にする回路が弱いことになります。国民が政党からの代表者を選び、国家で決まったことが国民にまた降りてくる、という循環によって民主主義は成立する。だから、政党が弱いということは、国家と社会が齟齬をきたすことにもなるのです」。

すると、二大政党制の場合、「国家と社会のチャンネルが二つ」しかない。その分、民意が集約されるが、その他の意見が切り捨てられる。他方、多党制だとチャンネルが多く、社会の細かい部分を代表できる。だから吉田さんは「なるべく多様な選択が可能な政党政治の方がいい」と考える。

だが、完璧な政党政治や選挙制度はない。吉田さんは丸山眞男を引用して、政治は「悪さ加減の選択」だと言う。「われわれが党員に意見を言えば、政党のリーダーに民意がある程度伝えられる。政治参加をしないと民主主義は成り立たない。そのツケはわれわれに跳ね返ってくる。だからこそ政治参加は大事なのです」。

政治制度を比較することの意味

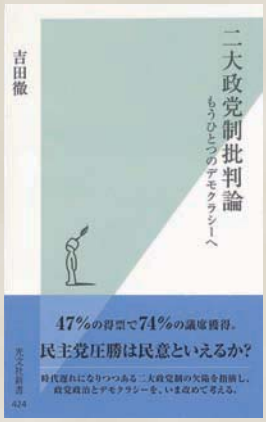
政治学では実験ができない。そのため、学問として客観性を担保する一つの方法が、各国の政治制度を比較すること。ある国の政治制度を分析する場合、他国の政治制度との比較によって、より深く知ることができるという。

では、外国と比較して、日本の政治や社会の特徴はどこにあるのだろうか。

「かつて日本で有意な政党は自民党と社会党と言われていたけれども、長きにわたって社会党は政権を取れませんでした。また、日本は明治時代からずっと『社会』が弱かった。日本は社会が脆弱で国家が強かったため、〝下〟からの政党がなかなか出てこない。官僚制のような国家機構とくっつくことによってしか、政党の存在は保証されなかったのです」。

二大政党制の国は現在、米国とイギリス、ニュージーランドくらいで、世界的に見ると少数派だという。他の多くの国は基本的に連立あるいは二極ブロック制であり、右と左のそれぞれの政党が連立して政権交代を行っている。

「われわれがどういう政治制度が良いのか迷ったとき、参考になるのがヨーロッパの政治。ヨーロッパは、革命や抑圧、民主制の崩壊や確立など、政治体制の変動を何度も経験している。例えばフランスは、フランス革命、ナポレオン帝政、復古王政……と続き、現在は第五共和制。歴史の中でいろんな制度を試しながら、政治体制の変化の実験をやっていると言えます。ヨーロッパ政治はいわば『実験報告の図書館』なんです」。



吉田さんの著書
『二大政党制批判論』（光文社新書）

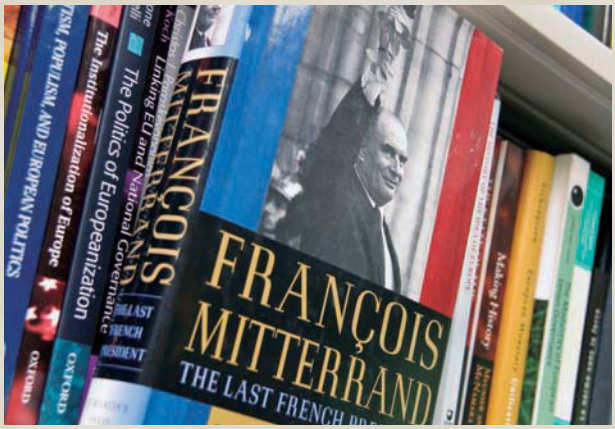
政治意識の芽生え

吉田さんは日本生まれだが、義務教育をフランスとオーストリアで受けた帰国子女。教室には世界中から多様な人々が集まり、そうした環境に影響を受けたという。「いろいろな人たちが一カ所に集まっているのですが、宗教・人種・肌の色などに関係なく、なぜ公共空間が成り立っているのか不思議でした。異なる環境に身を置くと、他者とどう関わっていくのかに腐心せざるを得ない。それも政治学を学ぶ上での重要な要素です」。

ジャーナリストの父の影響もあり、自宅に様々な週刊誌や雑誌があった。日本に戻った高校時代に、論壇誌を熱心に読み、早くから政治意識に目覚めたという。大学卒業後、日本貿易振興機構に三年間勤務。その後、東京大学大学院総合文化研究科に進学した。

政治学の面白さはどこにあるのか。

「政治学には答えがなくて、その理論も曖昧なものが多いから、『柔かい』学問と言えます。自然科学のように他の条件が等しいなら常に同じ結果が出る、というわけではありません。政治学におけるモデルは、経験則から導き出される帰納的なもの。政治学は多様で、哲学や計量分析もあれば、比較政治などの分野もあります。世界政治がどうあるべきかという問いから、今度の選挙はどの政党に投票すればいいのかという身近なところまで、問いの立て方がたくさんあるんです。その曖昧さに惹かれますね。一方で、政治の営みは人々の生死にかかわるという意味で実は『硬い』学問でもあります。どういう権力が人々を幸せにするのか。善と悪を常に念頭に置かなければなりません」。



フランスの元大統領ミッテランの本。
吉田さんは将来、ミッテランに関する本を書きたいとのこと。

自分の知らない環境に身を置こう

ドイツの哲学者、ゲオルグ・ジンメルの「若者がやることはいつも間違っているが、やろうとする意志はいつも正しい」という言葉を引用して、大学生へのメッセージを語ってもらった。「大学時代は人生を生きていくためにベーシックな練習をする試行錯誤の時期。たくさんの旅に出かけ、たくさんの本を読み、たくさんの恋愛をして、たくさん失敗すること。自分を客観的にみるために、自分の知らない環境に身を置き、他者を知ることで、新しい自分を発見できます。失敗しても、そこから教訓を引き出すことで人生も豊かになり、ひいては他者との『連帯の作法』を身につけられます」。

吉田さん自身、海外によく行き、多様な人々と付き合うようにしている。「文献を読むだけではなく、現場の空気を浴びないと分からないことがあります。分からないまま研究していると現実と乖離します」。政治学者の仕事は、政治概念の修正を施しつつ、現実に対して発信をして、両者をすり合わせることだ、と話した。